

Samuel Taylor Coleridge の想像力と空想力との 区別についての一考察

山 下 登

Samuel Taylor Coleridge (1772-1834) が『文学的自叙伝』(Biographia Literaria, 1817) に於て、想像力(Imagination)と空想力(Fancy)とを区別したことは、英文学史上劃期的な出来事として有名である。又其後、浪漫主義運動の中心をなす詩人や批評家達によつてこの区別が受け継がれていたことも注目すべきことである。

しかし今日この想像力と空想力との区別は現在の創作理論の価値としてはどの様な意味を持つてゐるのであろうか。尚現在に於ても認め得る意味あるものであろうか。筆者はこの問題の正当な解決を想像力と空想力の区別についての批判的見解を持つ詩人や批評家達に求めることが出来ると言ふ。即ち以下この点について、アメリカの Edgar Allan Poe (1804-1849) の批評論、『空想力と想像力』

(Fantasy and Imagination, 1840) とハーバード大学英語学教授、John Livingston Lowes (1867- -) の著した『ザナムウの道——想像力の道程の一研究』(The Road to Xanadu—A Study in the Ways of Imagination, 1927) の見解、及び詩人にして批評家、T.S.Eliot (1888-1965) の『詩の効用と批評の効用』(The Use of Poetry and the Use of Criticism, 1933) の批評見解を基にして、この問題を論じてみたいと思ふ。先ずこの論を進めるに当つて、次の(1)に於て、Coleridge が『文学的自叙伝』に於て述べた想像力と空想力の区別をより返り、又次の(2)に於て、浪漫主義時代に於ける詩人達の中で想像力について考えた人達に Coleridge の想像力と空想力の区別が如何に影響を与え、それが受け継がれ又、如何に想像力と空想力の区別が首肯されていたかを考察し、最後の四に於て、Co-

leridge の想像力と空想力との区別に対する批判的見解を見へ、それを以て結章とするにあつた。

II

Coleridge は一七九六年の秋、彼の作詩の無¹¹の親友と度田の会見の折、彼は Wordsworth から後に『抒情民謡集』(Lyrical Ballads, 1798) に載せられた『放浪する女』(Female Vagrant) と似た詩、『ハーレイブリ平原での冒險』(An Adventure on Salisbury Plain)^① と、う詩を朗誦して聞かやれ、深く感動し、その時の詩が如何なる力によって生み出されたかを幾度も瞑想して考えた結果、想像力と空想力とどう力を思い付いたと言つていふ。そして一八〇一年には W. Sotheby 宛の九月十日付の手紙の中や、

'Fancy, or the aggregating Faculty of the mind. Imagination, or the modifying and co-adunating Faculty'^②

(「私は Wordsworth が最初の最も偉大な哲学詩人として今後認められるであろうと確信してゐる。喜ばしい情熱の音楽を以て、修飾的能力たる想像力を以て——私が敢えて集合的能力たる空想力と峻別したのだが、——空想力とは創造力の定かならぬ類似物であり、我々は全くそれが創造するのだと信ずることが出来るというのではなく、それが創造するのだと想う」とが出来るところの意味のもの——を峻別した言葉の最高の意味での想像力を以て、思想と感情とを完全に、不斷に結合させ、融

の中や、

Wordsworth が他に類を求める得ない勝れた哲学詩人であり、豊かな想像的凜質に恵まれていぬことを力説しながら、想像力と空想力について言及した。そして一八一一年には義弟 Robert Southey (1774-1843) の編集する雑誌『*Omniana*』に想像力を

'shaping and modifying power'^⑤

(「形成的、修飾的能力」)
空想力を

'the aggregative and associative power'^⑥

(「総合的、聯想的能力」)

と述べて、始めて想像力と空想力の区別についての考を出版物として世に出した。更に一八一七年に『文学的自叙伝』を出版し、その中で比較的に詳しく述べ想像力と空想力との区別について述べるのである。では『文学的自叙伝』に於ける想像力と空想力の区別について見てみる。Coleridge は『文学的自叙伝』第四章に於て、

'fancy and imagination were two distinct and widely different faculties, instead of being, according to the general belief, either two name with one meaning,

or at furthest, the lower and higher degree of one and the same'^⑦

(「想像力と空想力とは一般に眞せられてゐる様に、一つの意味を持つる二つの名称ではなく、或いは更に言ふば、二つの同じ力の低く、高くといった程度を持つる名称ではなく、二つの別個の、非常に異なる能力である。」) と謂ひて、想像力と空想力とは程度の相違ではなく、全く別個の創作能力であふと述べるのである。そして更に Coleridge は『文学的自叙伝』第十一章に於て、

"The Imagination then, I consider either as primary, or secondary. The primary Imagination I hold to be the living Power and prime Agent of all human Perception, and as a repetition in the finite mind of the eternal act of creation in the infinite I am. The secondary Imagination I consider as an echo of the former, co-existing with the primary in the will, yet still as identical with the primary in the kind of its agency, and differing only in *degree*, and in the *mode* of its operation. It dissolves, diffuses, dissipates, in order to recreate: or where this process is rendered impossible, yet still at all events

it struggles to idealize and to unify. It is essentially *vital*, even as all objects (as objects) are essentially fixed and dead.

Fancy, on the contrary, has no other counters to play with, but fixities and definites.

The Fancy is indeed no other than a mode of Memory emancipated from the order of time and space; while it is blended with, and modified by that empirical phenomenon of the will, which we express by the word Choice. But equally with the ordinary memory the Fancy must receive all its materials ready made from the law of association.

〔[◎]〕

〔「私は想像力を第一或は第二へして分けたて考へる。第一の想像力はあらゆる人間の知覚のうちで活動的力にして第一的動因を有して、無限なる自我に於ける創造として永遠なる行為の有限なる心に於ける繰り返しとして考へる。第二の想像力は前者の反響であり、意識的意志を共い、而もその作用の種類に於て第一のものと同一であるが、程度とその操作の様式に於てのみ異つてゐる。それは再創造するため溶解し、拡散し、消散させ、或いはこの過程が不可能に立ち至らしめても、それ

は何としでも理想化し、統一せんと努力する。それは本質的に生きてゐるのであり、丁度あらゆる対象が対象としては本質的に固定し、死んでいるようだ。〕

それに對し、空想力は固定したものや有限なもの以外にその他の遊び相手を持たない。空想力は實際時間と空間の秩序から解放された記憶の一様式と変りがない。然もそれは我々が選択という言葉で表現している意志の経験的現象によつて混ぜ合わされ、修飾される。しかし空想力は普通の記憶を扱うと等しく、聯想の法則によつて既に作られたその素材の全てを受け入れねばならなかつた。

Coleridge は想像力を第一の想像力と第二の想像力に分け、第一の想像力が万人のものであるに對して、第二の想像力は芸術家のものであるとし、第二の想像力は意識的であると同時に無意識的に働き、詩の素材を溶解し、合着させ、創造する詩的構想力であると考えた。

又想像力に対し空想力を考へた。空想力は記憶を扱うものであり、記憶を聯合させ、聯想する聯想力であると考えた。

以上が Coleridge が体系づけようとした想像力と空想力を區別した想像力説の大要であり、當時に於てはこれが

全く新しい詩の創作の原理であった。

III

そしてこの區別は彼の同時代の詩人や批評家によつて、又彼より後から出た詩人や批評家によつて多少の見解の違ひはあるが、この區別は首肯され、確認されて来た。例えば William Wordsworth が 1815 年の詩集の序文に於て、

To the mode in which Fancy has already been characterised as the power of evoking and combining, or, as my friend Mr. Coleridge has styled it, "the aggregative and associative power," my objection is only that the definition is too general. To aggregate and to associate, to evoke and combine, belong as well to the Imagination as to the Fancy; but either the materials evoked and combined are different, or they are brought together under a different law, and for a different purpose.

(「空想力は喚起し、結合する能力」として、既に特色づけられて来たあの様式に、即ち親友 Coleridge が空想力を『総合的、聯想的能力』と呼んだ時に、私が反対した

のはその定義が余りに一般的であるところとに過ぎない。集約したり、聯想したり、喚起したり、結合する」とは空想力と同様に想像力にも屬している。しかしむらも喚起し、結合する詩の素材を異にしてくる。即ち詩の素材は異った法則の下に、異った目的の為に集められる。」)

と書いている如く Coleridge の説には反対しながらも想像力と空想力の区別を認め、それを支持しているのである。

それから想像力と空想力との文献を残した批評家 Leigh Hunt (1784-1890) が、Hunt が詩集『空想力と想像力』(Fancy and Imagination) に於て、「Fancy is a lighter play of Imagination, (〔空想力は想像力の軽い働きである〕) 云ふ

'Imagination belongs to Tragedy; Fancy to the comic' (〔想像力は悲劇に、空想力は喜劇的なものに属している〕)

(「想像力は悲劇に、空想力は喜劇的なものに属している」と述べて、想像力と空想力を区別してくる。

又その外、創作の能力として想像力と空想力を区別した

人は John Keats (1795-1821) があれ。Keats は友人、Benjamin Bailey に宛た一八一七年十月八日付の手紙の 1 節に於て、

'Fancy is the Sails, and Imagination the Rudder'^①
(「空想力は詩の帆であり、想像力は詩の舵である。」)

と述べて、論理としてではなく、極めて簡潔に比喩的表現を以て、詩の創作力としての想像力と空想力を区別していふ。

又 John Ruskin (1819-1900) ものの著、『近世画家論』(The Modern Painters, 1845-60) の第11巻(1846) の第十11章、『洞察的想像力について』(Of Imagination Penetrative) に於て、想像力と空想力を区別して、

'fancy will be superior to imagination'^②
(「空想力は想像力より勝れてくる。」)

と述べて、浪漫主義時代に於ける Imagination が Fancy に優位についての考え方に対し、新古典主義時代に於ては逆に Imagination より Fancy の方がより重要であると強調し、浪漫主義時代の芸術觀に対し、新古典主義の芸術觀を標榜してゐる。猶注意すべしに、Hulme の Fancy より言葉は Coleridge の Imagination へ detail^③。

(「空想力は外側を見ゆ。そして外側の描写をはつきり明るく、細かく描く」のが出来ゆ。想像力は心と内

的性質を見る。そして読者の目に感じやせぬ。しかし時として曖昧で、神秘的で、そして外側を詳しく述べると妨げられてくる。」)

方を踏襲して、「とて」と「も」。

又 T.E.Hulme (1883-1917) も死後出版された遺稿集、『思索』(Speculations, 1924) の『浪漫主義と古典主義』(Romanticism and Classicism) の中で、浪漫主義の時代に次いで、新古典主義の時代が到来したことを説いた後だ。

この言葉の意味に相当すると思ひよべ、「構想力」とでも訳すべきである。しかしそれにして、Hulme が浪漫主義以来の区別に反撥したりに、つては兎も角として、

(山下) *Fancy* と *Imagination* との能力を認めている
点に於ては浪漫主義時代の人達と一步も出ず、或して變り
がなく、なんどか出来る。

以上、浪漫主義時代に生れた想像力と空想力の區別とそ
れを受け継いだ人達を現代まで辿ったわけであるが、これは
は芸術理論の一つの血脉であり、小文学史の一冊を形成し
てゐると言ひやう。兎に角、これによつて一応 Coleridge
の創見であらうと言われる想像力と空想力の區別とその繼承
と影響が如何なるものであるかを辿つたわけである。

しかしそくに於て見るが如く、これに反駁する一連の人達
の中にこの区別に対するより近代的にして、合理的な見解
が用意されてゐるといふことに注目すべきである。

四

想像力と空想力とが二つの能力ではなく、一つの能力で
あるという考え方を導いた人としてアメリカの Edgar Allan
Poe (1809-1849) がある。Poe は Coleridge の無(ムヒ)
にてよゝ理解者にして心酔家であったが、詩や創作や批評
上の問題で実に多くの影響を受け、色々の面を継承したと
言える。

しかし今ここで問題としている想像力と空想力の区別に
ついてのみは彼の創作の体験上、次の如く強く反対してい

る。即ち、彼は批評、『空想力と想像力』 (*Fancy and
Imagination*, 1840) に於て、

“The Fancy,” says the author of the *Ancient Mari-
ner*, in his *Biographia Literaria*, “the fancy combines,
the imagination creates.” And this was intended, and
has been received, as a distinction. If so at all, it is one
without a difference; without even a difference of
degree. The Fancy as nearly creates as the imagina-
tion; and neither creates in any respect.”

(『老水夫』の著者は彼の『文学的自叙伝』の中や語り
てゐる。『空想力は結合』、想像力は創造する」と。そし
てこれは区別として考えられ、受け入れられて來た。例え
その様になつて、それは区別なき一つのものであ
る。程度の相違ぢやぬなし。空想力は想像力と同じ様に
創造する。そして、むねひめ或る點に於ては創造していな
い。) と述べて、Coleridge の想像力と空想力の区別について反
対した。この様に想像力と空想力の区別について批判した
のは英米文学史上、Poe が最初の人である。

次に Coleridge の想像力と空想力の区別に対する批判
的見解を述べてゐる人にアメリカのハーバード大学の英語

学教授である John Livingston Lowes がある。彼は一九二七年に『ザナドゥの道』(*The Road to Xanadu*) といふ心理学的見解に基いた劃期的な文学研究の大著を著した。」の書物は『想像力の道程による一研究』(*A Study by the Ways of the Imagination*) といふ副題が示し、こゝ様に Coleridge の有名な『老水夫行』(*The Ancient Mariner*) と『カブラ Kahn』(*Kubla Kahn*) との二つの詩の素材を求めて Coleridge の残した忘備録メモワールを中心にして、彼の読んだ読書の跡を追跡し、広大な文献を漁り、詩の製作に於て、Coleridge の想像力がどの様に働き、どの様にしてこの二つの詩が創作されたかを辿つた実証的な心理学的見解に基いた、文献による詩の創作過程と創作心理の研究である。特にその文献を扱う数量とそれを処理する科学的方法には驚歎すべきものがあつて、二つの詩の心像の出所を探つて、当時の航海記、探險記、科学雑誌、新聞、果ては芝居の広告に至るまで追い求め、それらの追求は凡て実証的な蓋然性を持つていて、又この書物の中心的題目である想像力に対する説明にも実証的な強みと手固さを持つてゐる。その説明によれば、Coleridge の読書や自然の観察や人々との会話等から得られた心像は Coleridge の頭脳の奥底に一時の間、忘却されずとも意識上の世界、

即ち心理学で言う潜在意識として蓄えられ、それからそれが詩人の詩の製作時の緊張によって誘発せられ、意識と潜在意識の相互作用によって、色々の心像が詩人の思うがままに自由に選択され、結合され、洗練され、表現として外界に表出され、詩として定着する、この最初の読書や自然の観察や会話等による心像の獲得から詩としての表現までの詩人の精神の全過程を Lowes は想像力と名づけているのである。ここでは想像力は主に潜在意識、即ち一種の記憶を扱うことになる。従つて、筆者がこの論文で問題としている Coleridge の想像力と空想力の区別については Coleridge は想像力は創造する力であり、空想力は記憶を扱う聯想力であるという意味のことを述べたが、Lowes にとっては、これはいずれも、詩の創作過程に於て、一種の記憶を扱う同時に働く一つの能力であり、一つの過程であつた。

即ち想像力は聯想しながら、創造するのである。そして Lowes は想像力と空想力の区別は別個の能力としての区別ではなく、程度による区別であるとして、次の様に結論づけたのである。

'But I have long had the feeling, which this study has matured to a conviction, that Fancy and Imagi-

nation are not two powers at all, but one. The valid distinction which exists between them lies, not in the materials with which they operate, but in the degree of intensity of the operant power itself. Working at high tension the imaginative energy assimilates and transmutes; keyed low, the same energy aggregates and yokes together those images which at its highest pitch, it merges indissolubly into one.^⑤

(「私は耳へかみる」の研究は想像力と空想力が葛ヶへつゝの能力ではなく、一つの能力であらむ。) 結論く落着かせぬふらう感じをもつていた。二つの能力の間にあふ妥当な区別はそれらが操作する素材にあるのではなく、操作する能力それ自体の緊張の程度にある。強く緊張している時、想像力は心像を融合させ、変形させ。

一方、緊張度を低く変ずるべ、同じ力はその最高度の調

整の時に分離す。つまりは自己をせ得るその心像をただ呼び集め、一緒にやるに留めるのである。^⑥)

この結論は先に述べた如く、Lowes の文献による実証的な研究方法と、着実な研究の成果から割り出されたものである。

次に Coleridge の想像力と空想力の区別について批判する。T.S. Eliot が ^⑦ Eliot が『諱の効用と批評の効用』(The Use of Poetry and the Use of Criticism) に於て Coleridge の想像力と空想力の区別として次の様に記している。

'Fancy may be "no other than a mode of memory emancipated from the order of space and time"; but it seems unwise to talk of memory in connexion with fancy and omit it altogether from the account of imagination.

There is so much memory in imagination that if you are to distinguish between imagination and fancy in Coleridge's way you must define the difference between memory in imagination and memory in fancy.

.....

You have to forget all about Coleridge's fancy to learn anything from him about imagination.^⑧

(「空想力は『時間と空間の秩序からの解きはなされた記憶の1様式に他ならぬ』かも知れない。しかし記憶に結びつけて空想力を語り、想像力の説明からはそれを省略す

るのは賢明ではない。……（中略）

想像力のなかには多くの記憶がある。従つて「若し」Coleridge の様に想像力と空想力を区別しようと思つたが、想像力に於ける記憶と空想力に於ける記憶の相違をはつきりやせなければならぬ。……（中略）

諸君は Coleridge から想像力について何かを学ぼうと思つたら、彼の空想力についての説をすっかり忘れてかからなければならぬ。」（「*The Road to Xanadu*」） Eliot は想像力と空想力をと別個の能力とする区別を否定し去つてゐる。いひで注意すべき」とは Eliot が「想像力の中には多くの記憶がある」と述べて、Coleridge が空想力には記憶を結びつけて考え、想像力には記憶を結びつけて考えなかつたのは間違である。Coleridge の想像力と空想力の区別を決定的に否定し去り、それについて強い確信を持つてゐるが、これは筆者が先に於て見た John Livingston Lowes の『*Xanadu*への道』（*The Road to Xanadu*）に於ける見解がその大きな支えだつてゐる。Eliot は『詩の効用と批評の効用』（*The Use of Poetry and the Use of Criticism*）の序文において次のように述べてゐる。

'As we have learnt from Dr. Lowes's *Road to Xanadu* (if we did not know it already) memory

plays a very great part in imagination, and of course a much larger part than can be proved by that book' (「私達が Lowes 博士の "The Road to Xanadu" から教えた通り、（今まで知らなかつたものと仮定して）記憶は想像力の中で大きな役割を演ずるものであり、もちろん、その本によつて証明される以上の働きをするのである。」)

この様に Eliot は Lowes の『*Xanadu*への道』の研究に目をみはり、賞讃をおしまなかつたのであるが、これによつて彼の見解が Lowes 博士の影響であることは大いに首肯しうるにちどあるとと思う。

Eliot は Lowes 博士と同じく想像力も空想力も記憶を扱う限りに於て、Coleridge の区別した二つの能力は一つの能力であると考えていふことが理解される。

以上、Poe, Lowes, Eliot の三人の想像力と空想力との区別についての否定的、批判的見解を見て來たのであるが、これによつて、Coleridge のたてた想像力と空想力とを別個の能力とする区別は現代に耐え得る創作原理としての価値があるのでなく、英米に於ける詩の創作原理について述べた創作批評史上に於ける一時期を占めていた批評の価値であることが明らかである。

註

- (1) Takeshi Saito (ed) : *English Critical Essays*. "What is poetry"; Kenkyusha Co., 1935. p. 77
- (2) *Ibid.*, p. 98
- (3) M. B. Forman (ed) : *The Letters of John Keats*, Oxford, 1952, p. 52
- (4) *Modern Painters*, Vol. II (*The works of John Ruskin*, Library Edition, Vol. IV.) London, 1903, p. 253
- (5) Herbert Read (ed) : *Speculations*, p. 113
- (6) Edgar Allan Poe: *Fancy and Imagination*, Everyman Library, 1948, p. 281, 282
- (7) 『耽美』の翻訳 *Coleride* の言葉
- (8) John Livingston Lowes : *The Road to Xanadu*, Constable, 1951, p. 103
- (9) T. S. Eliot : *The Use of Poetry and the Use of Criticism*, Farber and Farber, 1955, p. 77, 79
- (10) 前出。空想力の『藝術的、藝術的詩』の Coleridge の言葉
- (11) 『Omiana』は荷蘭語で「獨創」の意味
- (12) *Ibid.*, p. 78